

## 審査の結果の要旨

氏名 石鼎

本論文「Research on the Rural Cultural Landscape in Metropolitan Area of Chengdu, China—A Case in Dujiangyan City」は、中国成都大都市圏の都江堰市の沖積平野における、林盤を主要な構成要素とする散居集落の文化的景観について、その特質と歴史的変遷を解明するとともに、解明された事実にもとづき、文化的景観の保全のあり方を論じたものである。景観要素の空間的配置と住民の生活・生産方法についてのフィールド調査、および GIS を用いた空間解析にもとづき、地域スケールとコミュニティスケールの2つの空間スケールから、その特質と歴史的変遷が明らかにされるとともに、文化的景観の保全方針の具体的提言がなされている。

本研究の学術的成果は、以下の三点にまとめられる。

第一は、都江堰市の沖積平野に広がる林盤地帯を文化的景観の観点から定義し、その特質を明らかとしたことである。文化的景観は、一般に「人間と自然の共同作品」と定義されるが、本論文では、特に都江堰市の林盤地帯の文化的景観について「岷江の沖積平野における都江堰水利工と灌漑水路網、複数の家屋を樹林地が囲む林盤、及びその周辺の農地の総体として形成された農村景観」と定義した。そして、その特質として、①地域スケールでは、支渠、斗渠、農渠、網渠の4つのレベルの水路網によりなる巧みな灌漑水路システムが、個々の林盤とその周囲の農地を有機的につないでいること、②コミュニティスケールでは、林盤は居住空間であるだけでなく、農業、林業、畜産等種々の生産の場として複合的利用が行われる空間であること、等を明らかにした。

このような林盤内の土地利用システムは、住民の自給的・持続的生活の基盤であり、モンスーン地域のアグロフォレストリーの一形態であると結論づけられた。

第二は、伝統農耕期（1978年以前）、近代化時期（1978年 - 2008年）、震災復興期（2008年以降）の3時代区分より、文化的景観の歴史的変遷を明らかに

したことである。①伝統農耕期に文化的景観の基盤が形成されたこと、②近代化時期には、林盤内の建築様式や植生の変化、一部人口流出による林盤の空洞化、観光地化する林盤の出現などがみられたが、地域スケールでの灌漑水路システムと林盤の空間的配置には大きな変化はなかったこと、③震災復興期には、城郷計画法の制定と四川大地震の復興事業としての新農村計画により、居住地の集約化、林盤の消滅と跡地の農用地化が図られ、地域の文化的景観の構造に顕著な変化が見られたこと、等が明らかになった。

第三は、以上の成果に基づき、文化的景観の保全方針を提示したことである。①地域スケールでは、都江堰市が震災復興マスタープランで設定した主要城区周辺の幅 4 km のグリーンベルト地域を拡張し、新農村開発は原則的に禁止する林盤風景保全の核心区域と、新農村開発は許容するが巨大な宅地開発は制限し、小規模な集約居住を推奨する緩衝区域を設定することを提示した。②コミュニティスケールでは、新農村建設にあたって、林盤内での持続的な生活基盤を維持するために、変化が許容される要素と許容されない要素を特定し、それらの保全方針を提示した。

以上の業績に対し、論文審査においては、①林盤だけでなく灌漑水路システムに対する詳細な検討や、水路・林盤・農地といった文化的景観の構成要素の生態的機能の評価が必要であるが、それが充分とはいえないこと、②都江堰市の林盤地帯の文化的景観だけでなく、中国の他の地域における同種の文化的景観にかかわる検討を加えることで、本事例の相対的な位置づけを検討する必要があるが、それが充分ではないこと、③保全方針がコミュニティスケールでは詳細に検討されているものの、地域スケールでの検討がやや弱いこと、等の問題点が指摘された。

しかし、膨大な現地調査結果をもとに緻密な資料を多数作成し、都江堰市の林盤の文化的景観の特質を詳細に解明していることや、文化的景観の体系的な保全制度が存在しない中国にあつて、マルチスケールで文化的景観の特徴をとらえながら、その保全方策を体系的に論じたことは、中国における文化的景観の研究と実社会への応用という点において新規性・独自性が高く、学術的な貢献度と実用性・応用性の両面において、非常にすぐれた学術成果との評価を得た。

以上より、博士（工学）の学位を授与できると認める。